

「選好形成」について

－ハイデガーの現象学的存在論に基づく考察－

On the Construction of Preference

－ A Thought Based on Heidegger's Phenomenological Ontology －

藤井 聡
Satoshi FUJII

京都大学大学院工学研究科
Kyoto University

Keywords : Learning process, Existentialism, Dialectics, Bayesian

1. 「選好」の定義

一人一人の意思決定あるいは選択を決定するものと想定される「選好」(preference)という構成概念は、行動科学としての心理学のみならず、実社会の経済政策に重大な影響を及ぼしている経済学においても中心的な構成概念である。そしてそれ以外の社会科学においても、とりわけ数理的に社会現象を記述しようとする様な数理的な社会学や数理的な政治学においても「選好」は重大な意味を担い続けてきた。

ここに選好とは、日常用語で言うところの「好み」のことである。例えば、「甲さんの選好」と言えば、それは、「甲さんが何を好み何を好まないのか」という甲さんの「選択における傾向性」を意味している。

ただし、特定の数理的な研究領域では、選好はより厳密に定義されている。例えば、数理心理学においては、特定の人物の選好は、「選択肢間の順序付け」として定式化されている。つまり、数理的理論体系の中では、「選好」とは「ある個人甲が、ある選択肢aよりも選択肢bをより好ましく感じている」という関係そのものを意味するものとして定義されている。そして、しばしばそういう関係は「 $a < b$ 」と表記される。

さらには、数理心理学では、そうした選好が創出されるのは、その選択者が特定の「選好構造」を持っているためであると想定されることがしばしばである。この「選好構造」は、消費者行動理論では一般に「効用関数」と表現されている。つまり、 $a < b$ なる選好を甲が持つのは、「効用aよりも効用bが大きい」という様な効用を創出する様な効用関数(あるいは選好構造)を、その甲が持っているからだと説明される(e.g. 竹村, 2009) [1]。

ミクロ経済学では、この「選択行動」は「選好」に一致すると想定される。つまり、人々の行動は、人々の「選好」によって説明できるという立場に立つのである。そして現実の社会現象、経済現象はミクロな一人一人の行動の集積と見なすこともできることから、マクロな社会経済現象は、畢竟、一人一人の「選好」あるいは「選好構造・効用関数」によって説明することができると想定

されている。

さて、先に述べた日常用語における「選好」(好み)とは、以上に述べた数理心理学において厳密に定義される「選好」と「選好構造」「効用関数」の双方を含む概念として用いられている。つまり、「あの人の好み(選好)」という言葉は、「aよりもbを好む」という選好関係の事実を表現しようとする場合の言葉として活用されているばかりでなく、「aよりもbを好むような性質」という選好構造・効用関数を表現しようとする場合の言葉としても活用されている。については、本稿では、数理心理学や消費者行動理論で「選好」と呼ばれているものと「効用関数」「選好構造」と呼ばれているものの双方を含めた概念として「選好」という用語を用いることとする。

2. 「選好」の形成の問題

さて、このように定義される「選好」であるが、例えば、現在主流派となっている新古典派経済学(以下、主流派経済学と呼称)では、この「選好」そのものが、一人一人の行動、ひいてはマクロな経済や社会の動態を決定づけるものだという立場に立つのであるが、その「選好」がいかんして形成されるのかについては言及しないのが一般的である。それ故、主流派経済学は、現実の経済がどのように変化するかという点について十分な回答を提供することができない理論構造を内在していると言える。そして選好を重視しつつ社会の動態を記述しようとする数理社会学も数理政治学も同様の事態を抱えていることから、それらもまた、記述しようとする社会や政治の動きを十分に説明することができない理論構造を内在している。さらに言うなら、数理的な経済学、政治学、社会学のみならず、一人一人の行動を踏まえながら社会の動態の説明を試みる「方法論的個人主義」(Methodological individualism; Elster, 1989 [2])の考え方を一部にでも取り入れている社会科学はいずれも、同様の問題を抱えているということもできる。

しかしながら、「選好の形成」については、未だ十分な議論がなされていないのが実情である。

ただし、選好形成の問題も、一部において議論されて

いることは、ここで改めて指摘しておきたい。この問題に最も積極的に関与しているのは、社会的な全体的過程ではなく、個人の行動的、心的過程を取り扱うことを専らとする心理学である。例えば、LichtensteinとSlovicは、2006年に「The Construction of Preference.」(選好の形成)という書籍を出版している。この書籍は、主として認知的な意思決定研究の中で、選好形成についてどのような研究がなされ、どのようなことが明らかにされてきたかが取りまとめたものである。認知的意思決定研究では、例えば、人々の(狭義の)選好は、対象の客観的な属性(例えば、大きさや値段や機能)に影響を受けるのみでなく、「意思決定の問題の記述の仕方」や「問題の中で決められた“答え方”(例えば、選択で聞かれるのか、連続変数の評価を求められるのか、等の違い)」によっても異なったものとなることが明らかにされている。前者の現象は特に「フレーミング効果」[3]と呼ばれ、後者の現象は「選好逆転」[4]と呼ばれている。こうした現象はいずれも消費者行動理論では「効用関数(選好構造)が、状況によって変化」した現象と解釈せざるを得ない。すなわち、こうした現象は人々の選好構造、あるいは、広義の「選好」が、意思決定の状況によって形成される、ということを実証するものと解釈できるのである。これらの現象の他にも、選好形成に関わる意思決定理論としては、SvensonのDifferentiation and Consolidation Theory [5] や、MontgomeryのDominance Structure Theory [6] 等を挙げることができる。これらはいずれも、意思決定の問題や状況に応じて、消費者行動理論で言うところの効用関数(選好構造)を“アドホック(その場限り)に作り上げていく”ことを前提とした意思決定理論であり、それぞれ、その選好の形成プロセスにどのような定性的な傾向が存在するのかについての一群の仮説から構成されるものである。

このように、少なくとも心理学においては「選好形成」の議論は重ねられてきているのであるが、本稿で定義する選好、つまり、日常用語における「好み」という意味における「選好」の形成については、以上に紹介した心理学の選好形成議論は、全くもって不十分なものにしか過ぎない。

まず、LichtensteinとSlovicがとりまとめた選好形成の議論はいずれも一定の実証的妥当性がある現象であると思われるものの、それらはいずれも「アドホックな選好形成過程」を取り扱うものであるという点である。彼らの実証研究が明らかにしているように、我々の選択や選好に、そうしたアドホックな側面があるということが事実であることは疑いようがないものである。しかし、我々が日常用語で、「好み」という言葉を用いる時は、そうしたアドホックに形成されるものを想定しているのではない。音楽の好み、食べ物の好み、という言葉はいずれも、時と場合によらずに安定的に特定個人が持ち続ける選択における傾向性を意味するものとして用い

られている。そして少なくとも我々の日常を振り返るに、そうした非アドホックな、持続的な選好が存在していることもまた、間違いなものであろう。

この点に関して、Fujii & Gärling (2003) [7] は、広義の選好は、「時と場合によらずに持続する安定的な部分」(core preference: 核選好)と、「時と場合によってアドホックに変化する部分」(contingent preference: 状況依存的選好)とで構成されると議論している。そして、この定義に従うなら、既往の心理学研究では、「状況依存的選好の形成」については様々な研究が進められている一方で、「核選好の形成」についてはほとんど明らかにされていない、というのが実態であるものと考えられるのである。

かくして、経済学や社会学、政治学などの多様な社会科学にとって重大な意味を持つ「選好形成」については、その研究を最も推進している心理学においてすら、十分に明らかにされていないのである。

このことは、少なくとも先に述べた方法論的個人主義を採用する傾きの強い社会科学の諸領域は、いずれも重大な論理的欠陥を内包していることを含意しているのである。

3. 本稿の目的

本稿は、以上の背景の下、状況依存的選好のみならずそれぞれの意思決定者の核選好の形成を含めた「選好形成」の過程についての一つの理論的可能性を提案するものである。

そして特に本稿では、選好形成を考えるにあたって、ドイツの哲学者、ハイデガーが彼の主著「存在と時間」[8]にて展開した現象学的な存在論を、その理論的枠組みとして採用する。これは、人間は、これまでの認知心理学が想定してきたような「情報処理を行う存在」以上の、かつ、これまでの動物行動心理学が想定してきたような「オペラント/レスポナント学習する存在」以上の、「意味を付与したり操作したりすることができる存在」であるに違いないと想定したことが基本的な理由である。すなわち、そうした「意味」の問題を考えずして、人間の「好み」の問題を、核選好の存在も見据えた上で考えることは不可能であろうと想定したためである。すなわち、人間が普段ごく当たり前に様々な対象物に対して付与している「意味」があるからこそ、人間は様々な「好み」を持つに至っている、あるいは言い替えるなら、人間が付与する多様な「意味」の在り方の一つとして「好み」というものがあると想定したのである。そして、ハイデガーの存在論は、そうした人間の「意味」の形成過程そのものに立ち入った論考であることから、選好形成を考えるにあたりハイデガーの存在論は重大な意味を持つと期待されるのである。

4. 現存在, シンボル体系, 意味, そして「選好」

ハイデガーは、我々が普段人間と呼称している存在は、「現存在」であると論ずる。ここに「現存在」とは、物心がついた時にはもう既に「投げ出されて」（被投されて）しまっていた「世界」の中に（世界内存在として）存在している、という人間の在り方を言うものである。そして、この現存在は、自身が認知している「環境」に対して、様々な「意味」すなわち「シンボル」を「企投」（付与）している（＝解釈している）ものと論ぜられる。例えば、我々日本人は一定の長さの棒のペアに対して「お箸」という意味を「企投」しているが、お箸で食事を取ったことが全く無い海外の人々にとっては、それは食事のための道具ではなく、単なるペアの棒という程度の意味しか「企投」しないだろう。

さらに、こうした様々な事物についての「意味」「シンボル」は、複雑に関連した「体系」を作り上げている。例えば我々の“日本文化”においては、お箸、お茶碗、湯飲み、ちゃぶ台、お米、たくわん、炊飯器... というそれぞれの事物の意味は、互いに密接に関わり合い、体系をなしている。そしてそうした体系そのものが無ければ、「お箸」という言葉そのものがナンセンスなものとならざるを得ないのであり、そうした体系があるからこそ、個々の事物に意味が“宿る”こととなる。つまり、この体系は「独立して存在する意味」が寄せ集められて「体系化」されるのではなく、体系そのものが一次的にあり、そこから個々の事物の意味が二次的に、あるいは、より厳密に言うなら「同時相即的」に浮かび上がる、という類の体系なのである。そしてこうしたハイデガーの存在論における意味の体系は、一般に「シンボル体系」と呼ばれている（なお、シンボル体系については、後に詳述する）。

このようにして、それぞれの現存在にはそれぞれの「シンボル体系」をもつのであるが、このシンボル体系は、その現存在が世界内のあらゆる事物に対して抱く意味の源泉となっている。そして言うまでもなく、その現存在の特定の事物に対する「好み」、すなわち、「選好」もまたその現存在がその事物に対して抱く“意味”の一種である。したがって、選好もまた「シンボル体系」に由来するものと言わざるを得ないのである。

かくして、「選好形成」の過程は、シンボル体系が如何にして変化するのか、というシンボル体系の変遷過程を理解することで始めて、理解されるものと期待されるのである。

5. シンボル体系における道具的連関性

現存在の「シンボル体系」を考える上で、重要な位置を占める構成概念が「道具的連関性」である。ここに、道具的連関性とは、世界内の各種の事物が、現存在にとっ

ては、特定の“目的”を達成するための“手段”すなわち“道具”として活用可能である一方、その“道具”を活用するためには、その道具を活用すること自体を“目的”とした“手段”が必要で——、という連関関係を言うものである。例えば、“食事”をするという目的のために“お箸”があり、そのお箸を使うためには、それを保管する“水屋”が必要であり、水屋をおいておくために“台所”が必要である。さらには、そのお箸や水屋や台所を所有するためには、近代経済社会では“金銭”が必要であり、そのために“労働”が必要であり、それを続けるために、やはり“食事”を日々とることが必要である。このように、我々の身の回りのあらゆる事物は、さまざまなかたちで“手段”や“目的”となり、現存在の活動に関与しているのである。こうした道具の連関が、道具的連関なのであり、日本人にとっての道具的連関において“お箸”は“お箸”としての意味が浮かび上がる一方でこうした道具的連関を持たない海外の人々にとっては、お箸は単なるペアの棒としてしか捉えられなくなるのである。こうして道具的連関は、シンボル体系において重要な意味を持つ部分的要素となるのである。

さて、こうした道具的連関は、必ずしも、ハイデガーが「現存在」と呼んだ我々人間でなくても、“生体”であるならば、その複雑性の程度にこそ差はあったとしても（そして、それを自認しているか否かは別として）所持することができる。ここで非現存在である生体を「動物」と呼び、これを「現存在」と区別するなら、「動物」においても、自身の環境世界に対して“道具的意味”を付与していることとなる。なぜなら、動物が生体である以上、環境に持続的に働きかけ、生体活動を維持していくことに成功し続けているからである。このことは、それぞれの動物は、それが如何なる生物であろうとも自身の環境世界における特定の事物に対しては特定の働きかけ（例えば、エサを取る、威嚇する、住み処を作る、等）をする一方で、それ以外の事物に対してはそうした特定の働きかけをしない、ということの意味している。すなわち、動物が生体として生き続けていけるのは、特定の事物に対して“道具的意味”を（繰り返しとなるが、それを自覚しているか否かは別として）付与しているからに他ならない、と解釈しうるのである。

6. 基礎的な道具的連関性の学習

この様に、選好とはシンボル体系に依存するものであり、かつ、シンボル体系において道具的連関性が一定の位置を占めている以上、道具的連関性の形成や学習は、選好形成において重要な意味を担うこととなる。この点に着目すると、選好形成には、行動主義心理学 [9] で議論されてきた次の3つの契機が、少なくとも存在するであろうことが含意される [脚注 1]。

①生得的準備性 (preparedness)

②レスポナント (respondent) 学習

③オペラント (operant) 学習

①の生得的準備性とは、その個体が生まれながらに持っている道具的連関性の学習についての傾向性と言う。例えば、人間は、生まれながらにして甘いものや脂身を好み、苦いものや腐敗臭のものを嫌う傾向を持つが、これは、生得的なものである。こうした刺激は無条件刺激とも言われるが、こうした条件が生得的なものであるのは、それらの刺激が、その生体にとって「道具的に意味あるもの」(例えば、採餌などに意味あるもの)だからであると解釈できる。

これらは生まれながらにしての「選好」であり、必ずしも選好の「形成」とは直接言えるものではないが、こうした生得性は、「学習」の過程にも決定的な影響を及ぼす。例えば腐敗しているか否かに関わる刺激(腐臭や味覚等)については、それ以外の刺激よりも急速に学習する、などが考えられる。つまり、選好の初期的な状況、ならびに、その学習過程は、その生体の生まれながらにしてもっている性質に大きく依存しているのである。

②のレスポナント学習とは、「パブロフの犬」の実験でよく知られた学習を意味するものである。この実験の例で言うなら、犬は餌を見るだけで唾液を出すのだが、餌を見せると同時にベルの音を聞かせ続けると、その内、ベルの音を聞くだけで、唾液を出すようになる、というものである(なお、厳密に言えば、この実験における餌は「無条件刺激」、唾液の分泌が「反応」で、ベルの音はもともとが「中性的な条件刺激」であったが、それが繰り返しその無条件刺激と「対提示」され続けると、その内にレスポナント条件づけられ、特定の反応をもたらすようになる、と言うことができる)。つまり、この犬にとってみれば、最初は無意味なベルの音が、特定の学習を通して、「道具的に意味あるもの」さらに(語弊を恐れずに)言うなら「好ましいもの」になったのである。つまり、この犬は餌が必ずベルの音と共に出現するという経験を通して、ベルの音を好む選好を「形成」するに至ったのである。

③のオペラント学習とは、特定の行為を行えば必ず道具的に意味のあること(例えば、餌がもらえる、苦痛が訪れる、など)が(随伴して)生起する、という経験を繰り返し行くと、その特定の行為をより高い(あるいは、低い)頻度で実施するようになる、という種類の学習である。例えば、特定の行為を褒められ続けると、その行為を行うことを、だんだんと“好む”ようになる、という種類の学習である。つまり、特定の行動を行うことが特定の道具的な意味を持つ帰結をもたらす、という形で、その生体の道具的連関性に変化が生じ、特定の行為に道具的な意味が付与される事となり、その行為についての選好が「形成」されることとなるのである。

この様に、現存在=人間を含む生体の選好の基礎に位置づけられるであろう“道具的連関性”の形成と変容、

あるいは、学習においては、生得性、ならびにレスポナント学習、オペラント学習が重要な役割を担っていることが、従来の行動主義心理学によって明らかにされている。それ故、生得性、ならびに、レスポナント学習、オペラント学習が現存在=人間の選好に重大な影響を及ぼしているのである。

ただしこれらだけで、現存在の選好形成過程の全てを説明することは不可能である。なぜなら、これらの行動心理学的な学習プロセスで構築される“道具的連関の体系”は、現存在の“シンボル体系”とは本質的に異なっているからである[10]。

では、それらはどのように異なっているのだろうか?

この「質的な差異」を理解するためには、“シンボル”と“シグナル”の相違を理解する必要がある。以下、この両者の質的差異について述べることにしよう。

7. シグナルとシンボル

ハイデガーの存在論においては、“シンボル”は“シグナル”の一種であると見なされる。については、シンボルを述べる前に、“シグナル”とは何かについて述べることにしよう。

シグナルとは、ある“生体”とその“環境世界”を考えた時に、その生体とその環境世界内の一要素より読み取ることを通じて、特定の行動・反応が駆動されるようなものを言う。例えば、コウモリなら、視覚よりもむしろ“聴覚”を基本とした、コウモリの環境世界を構築していると考えられる。その時、コウモリの環境世界の中にコウモリが常食とするような餌がある場合、コウモリはそれを採取するための行動を採る。この時に、コウモリによって発せられた超音波に対応して“餌”が反射する音波こそが、“シグナル”である。ミツバチにとって蜂蜜の臭いは蜂蜜のシグナルであり、魚にとってオキアミの臭いもまたシグナルである。そして言うまでもなく、生体にとって採餌行動や生殖行動等の諸活動に関わりのある事物が、生体に対して発しうるものはいずれも“シグナル”となり得る。ただしこれも言うまでもないが、嗅覚の無い生物にとって、蜂蜜やオキアミの臭いはシグナルになり得ない。つまり、“シグナル”とは生体とその生活環境との間の相互作用の中ではじめて定義されるものなのである(なお、先の章の議論を踏まえるなら、こうしたシグナルはいずれも、生得的な無条件刺激か、オペラント学習やレスポナント学習を通じて学習された諸刺激であると考えられる)。

ここで、“シンボル”とは、こうしたシグナルの特種な一形態である。

例えば、モリスは、生体が特定の行動を制御するにあたって、他のシグナルの代理をする記号を自らしつらえ、それが代理されている記号と同じ意味を持つ場合、その記号は“シンボル”である、と述べている[11]。

つまり、シンボルとは、例えば、言語体系の中で、人工的に付与される“名前”の様に、人工的にしつらえられ、しかも、具体の事物を指し示すことができるような記号を言うものとして定義される。同様の定義は、ヤーキズも述べている。ただし、ヤーキズは、シンボルは、環境世界の要素と必ずしも直接的に関わる必要はなく、当該の要素、あるいはそのシグナル、さらには、そのシグナルの代理信号としてのシンボルが消失していたとしても、一定の反応を誘発しうるシグナルを言うものとして定義している[10]（それ故、「麒麟」や「龍」といった空想上の存在を指し示す言葉は、シンボルである）。

つまり、モリスやヤーキズの定義に従うなら、シンボルとは、1) 人工的に産出され、かつ、2) 他のシグナル（あるいは、他のシンボル）を指し示すことができる、という特殊なシグナルなのである。かくして、言葉や数字といった、人工的であり、かつ、他のシグナルを指し示すことができる機能を持つシグナルは、“シンボル”となるのである。

さて、こうした“シンボル”を使いこなすことができる能力を“シンボル能力”と呼ぶとするなら、今のところ、人間以外の生体において、こうしたシンボル能力を持たないということが指摘されている[12, 13]。それは、例えば、天井に吊されたバナナを使うための道具として棒を使うことができるチンパンジーですら、それが可能なのは、バナナと棒が「同一の視界に入っている」場合に限られるのであり、棒が別の部屋に置かれていれば、その棒をバナナを採るための道具として活用できなくなる、というという実証的事実からも示唆される。これはつまり、チンパンジーは、ある瞬間に認知される棒とバナナとを関係づける能力を持つ一方で、時刻 T_1 に見たバナナと、別の部屋で時刻 T_2 に見た棒とを関係づける能力を持たないことを意味している。ところが人間は、いとも容易くバナナを採るために別の部屋の棒を取ってくるができる。これは、バナナとは同時に提示されない棒それ自体に対して、「バナナを取ることができるモノ＝“棒”」というシンボルを付与しているからに他ならない。そして、このシンボルは、特定の時刻のみに通用するものではなく、様々な時点において通用する時間的な不変性を帯びたものである。ところが、チンパンジーにしてみれば、棒は単なる物体でしかなく、バナナと共に置かれた棒と、別の部屋に置かれた棒とは、全く別物としてしか知覚されてはならず、両者を関係づける力を持たないのである。

つまり、シンボル機能とは、ある時点に眼前にある環境世界における“関係”（例えば部屋Aに居る時に構成される環境世界内の関係）と別の時点における“関係”（例えば部屋Bに居る時に構成される環境世界内の関係）を、“シンボル”という時間的な不変性を人工物を介して“関係”付ける、人間のみが持つ能力を言うのである。

さて、シンボルは、このように一定の時間的な不変性を

持つものである以上、生体が個々の瞬間にのみ拘束されている限り、こうしたシンボル機能を所持することが不可能である。その一方で、将来を先駆したり、過去を反復するような、“時間性”を持つ生体であるなら、時間的不変性が前提とされているシンボルを所持することができるのであり、それ故にシンボル機能を獲得することとなるのである。

そして、ハイデガーが主張するように、そうした“時間性”を持ち、動物が逃避することができなかった瞬間瞬間の呪縛から逃げ出すことができるようになった存在こそが、現存在＝人間なのである。つまり、ハイデガーが言う「時間性」を獲得したが故に、現存在＝人間はシンボル機能を獲得するに至ったのである。

8. シンボル機能に基づく道具的連関性の学習

さて、以上の議論を踏まえると、先に述べたオペラント学習やレスポナント学習は、シンボル機能を持たない生体一般において見られるものであることから、いずれも“シンボル”ではない単なる“シグナル”に関わるものであることが分かる。

しかし、我々は今や、現存在＝人間という生体だけが、“時間を超越して、関係と関係を関係づけるシンボル機能”を持つ、という事を理解する地点に立っている。それ故、単なるシグナルとは異なる“シンボル”の体系の形成プロセスに着目しつつ、選好形成プロセスについて考察を深めていくことが可能となる。

ついでにはここではまず、シンボル体系の形成過程の中でも、“道具的連関性”という側面におけるシンボル体系の形成プロセスについて考察することとしたい。

まず、人間＝現存在がシンボル機能を持つ以上、彼は「ある行為Aを行えば、最終的には帰結Bが得られるであろう」という「道具的連関性」を、必ずしもオペラント学習／レスポナント学習を経ずとも予期できるようになる。すなわち、シンボル機能があれば、行為Aと帰結Bとの間の随伴性や対提示を繰り返し経験する事なく、シンボルを操作することを通じて行為Aと帰結Bとの間の関係を予期し、それに基づいて「意思決定」を行うことが可能なのである。そして、帰結Bを得るという“目的”を明確に“意図”した上で行為Aを選択することができるようになる。つまり、現存在＝人間はシンボル機能を持つからこそ“意図的行動”(intentional behavior)を想定した“意思決定”(decision making)を実行することができるようになったのである。

さて、こうした意思決定において重要なのは、行為Aを行えば帰結Bが得られるという因果性についての推論である。

この推論過程において重要な役割を担いうる学習として挙げられるのが、「ベイズ学習」である。

行為と帰結の間には、時間的隔たりがある以上、常に

不確実性がつきまとう。行為Aをすれば帰結Bが得られるとは限らず、帰結CやDが起こる事もある。こうした場合、我々は、様々な試行錯誤を繰り返すことを通じて、行為Aを行った時に帰結Bが得られる「確からしさ」、あるいは、「主観確率」を想定することとなる。この主観確率が、経験を通じて学習されていく代表的なプロセスが「ベイズ学習」である。ここで、無条件刺激（シグナル）や、それを基本として学習されたレスポナント学習やオペラント学習にて条件付けられる等して、好まれるに至った「ある好ましいシグナル」を導き得る（主観）確率が高い「ある行為」がベイズ学習によって同定されれば、その現存在＝人間は、その「行為」に対して、「ある好ましいシグナルを導きうる行為」という「シンボル」を付与するに至ることが考えられる。そしてその結果、その行為を「好む」ようになることが考えられる。つまり、ベイズ学習を通じた主観確率の形成プロセスは、シンボル体系の形成に寄与し、それを通じて、選好形成をもたらすものと考えられるのである。

さて、このベイズ学習において重要となるのは、「初期確率」である。これは、一切個人的な経験がない場合において、個人が想定している主観確率を意味するものである。こうした初期確率は、その個人が暮らす社会の中で、歴史的・伝統的に蓄積された因果関係についての知識を、何らかの形で「他者からの伝承」されることを通じて形成されるものと考えられる。例えば、「あれをすれば〇〇だからしてはだめ」「こうすれば〇〇だから、こうしなさい」などの形で、直接的に伝承されることもあれば、皆が「こうすれば〇〇になる」と皆が信じているだけで、初期確率が形成されることとなる。

先に、「生得的準備性」によって様々な基礎的な学習過程が大きく支配されるという点を指摘したが、こうした社会的、文化的な側面も、現存在＝人間のシンボル機能を前提とする学習プロセスにおいても大きな影響を及ぼしうるものと考えられる。それ故、こうした社会的・文化的な条件は、「社会的準備性」と言うこともできる。

さらに、シンボル機能を持つ現存在＝人間であるなら、より高次の推論を行うことができる。最も典型的なのが、数学というシンボルを駆使し物理学理論を活用した推論である。こうした推論によって、我々人類は月への往復旅行が可能となったのである。こうした高度の推論でなくとも、我々は日々、様々な意思決定場面で、この行為を行えばどのような帰結が得られるのかを、ベイズ学習とは異なる過程を通してロジカルに推論している。こうした、「論理的推論過程」もまた、道具的連関性に関わるシンボル体系の変容や精緻化、すなわちその形成に寄与するものと考えられるのである。

9. 本来的な現存在と、非本来的な現存在

この様に、現存在＝人間は、「時間性」を携える事によっ

て、ベイズ学習や推論過程等を活用して、動物よりもより効率的に、「目的」を達成することが可能となったのであり、それを通じて「道具的連関性」としての「シンボル体系」を形成していくものと考えられるのである。

ただし、「道具的連関性」は「シンボル体系」のあり方の一様態であるが、それは、必ずしも唯一の様態ではない。なぜなら、ハイデガーの議論に基づくなら、「おのれの将来の可能性」に対してどの様に「気遣う」のかによって「シンボル体系」が異なったものとなるからである [8]。

ハイデガーによれば、種々の「気遣い」の形態の中でも、唯一本質的なものは自分自身の究極的な将来の可能性である「死」を先駆的に覚悟するというものである、と指摘されている。そしてさらには、こうした死に対する「先駆的覚悟性」に裏打ちされた「時間性」こそが「本来的時間性」であり、それ以外の時間性は「非本来的時間性」しか過ぎないのだ、と論ずる。

以下、ハイデガーのこの着想に基づいて、「選好」という視点からどのような相違が、本来的な時間性を持つ「本来的な現存在」とそうではない「非本来的な現存在」との間に生ずることとなるのかを、論考してみよう。

「非本来的時間性」しか持たない現存在＝人間が、「非本来的」に生きている場合には、確実に訪れるおのれの死から目を背け、目の前に現れ出る諸現象である「現前」に没頭する。そして、将来は漠然とした「期待」として立ち現れ、既在は既もはやないものとして「忘却」される（表1参照）。かくして、「非本来的な現存在」は、将来や既在よりも「現前」をとりわけ重視せざるを得なくなる。そして、「現前」における様々な刺激を、享樂的に求める傾向性が強くなる。こうした状態は、戸田 [14] の言うところの「いま・ここ原理」（いま、ここの事しか考えず、将来や他者の事を一切気遣わないという行動原理）に支配された状態である。あるいは、社会的ジレンマ研究で言われるところの一切の協力的傾向を持たない完全なる非協力者 [15] だと言うこともできる。さらには、新古典派経済学が想定する合理的経済人 [16] と、完全に一致した人間だということもできようし、「生の哲学」を主張したオルテガ [17] の用語を借りるなら「大衆」と言うこともできよう。いずれにしても、彼はシンボル機能を持つ現存在でありながら、そのシンボル機能が相当程度弱体化した、単なる生物学的な生体＝動物の行動形態に近い存在にしか過ぎないのである。

それ故、この様な「非本来的な現存在」が仮に将来を先駆することがあったとしても、彼は己の「死」までを先駆することなどはあり得ない。将来時点における個人的な利益（行動主義心理学で言われるところの、無条件刺激・条件刺激、あるいは強化子等）に配慮することが関の山である。つまり彼は、折角のシンボル機能を、単なる「利己的利益の増進」にのみ活用してしまっているのである。

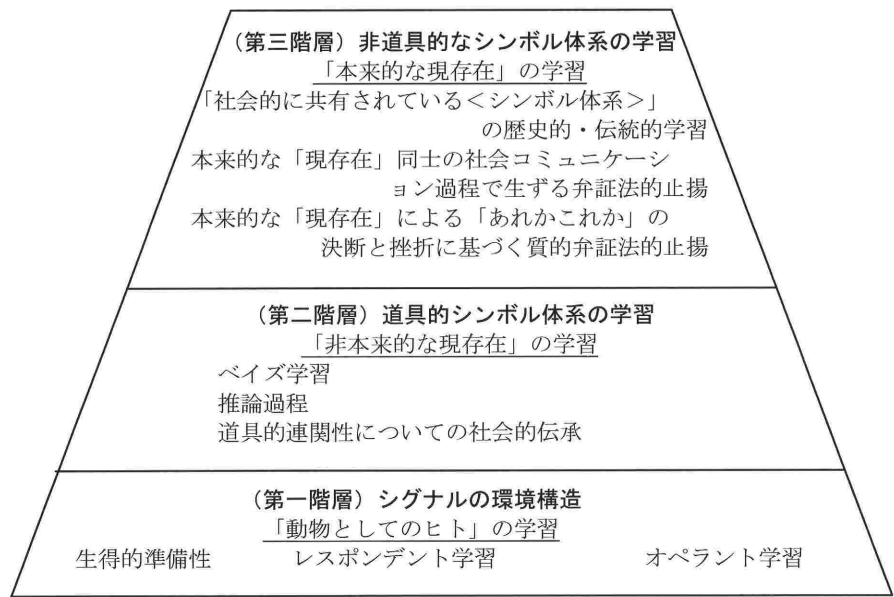


図1 シンボル体系の形成としての選好形成をもたらす緒契機の構造

かくして、「非本来的な現存在」のシンボル体系は、「道具的連関性」と基本的に重なり合うこととなるのである。

一方で、究極の可能性である死に対する先駆的覚悟に裏打ちされた「本来的時間性」を携えた現存在＝人間は、究極的な死をはじめとした、将来における「あらゆる可能性」を先駆的に気にかけるのである。彼はそれと共に、既在を「反復」的に繰り返し意味づけ、解釈し続ける。そして、その「先駆」と「反復」によってはじめて開かれてる、己の置かれた歴史的状況を「瞬間」的に直視するのである（表1参照）。

したがって、「本来的な現存在」は、将来に起こりうるあらゆる可能性に思いを馳せつつ、過去についても十分に反復することから、「非本来的な現存在」とは比べものにはならないくらいにシンボル体系を精緻化させていくこととなる。

このように「本来的な現存在」は、「非本来的な現存在」よりも精緻なるシンボル体系を持つが故に、「非本来的な現存在」とは様々な点で異なる選好を有する事となる。

第一に、「本来的な現存在」は、究極的な可能性である「死」を先駆的に覚悟することから、生誕から死に至る自身の生涯全体を見据え、その生涯全体の意味を問う傾向性が、「非本来的な現存在」よりも格段に強い。そして、自らが、この「世界」の中に投げ出されている「被投的存在」であることをありありと了解する。それと共に、将来時点における肯定的な個人的利益（無条件刺激・条件刺激、あるいは、強化子）の獲得「のみ」を目的に据える傾向性が、「非本来的な現存在」よりも低い水準に留まることとなる。

この時、自らの生全体を、さながら自らの生の外側から眺める力を持つ「本来的な現存在」は、個人的な利益の獲得とは異なる、例えば「善く生きる」「美しく生きる」というような倫理的・宗教的・美的な目的を措定す

るに至る。そしてそれを通じて、シンボル体系も単なる道具的連関性よりもより豊かなものとなっていく。その結果、「非本来的な現存在」の道具的連関性の中では「損や得」という価値しか浮かび上がらない一方で、「本来的な現存在」においては、真偽、善悪、美醜、聖邪等の価値観が浮かび上がることとなるのである。

そして第二に、「非本来的な現存在」は、十分に将来を「先駆」する力を持たないため、「利己的利益の増進」という基準でも、十分に賢明なる予期を行った上で、彼らの言う「合理的な」行動を選択することもできなくなってしまうが、自らの死をすら先駆する力を持つ「本来的な現存在」は、様々な意味で将来を先駆することが可能である。それ故、「本来的な現存在」は、「利己的利益の増進をもたらす合理性」という、「非本来的な現存在」が“のどから手が出る程”に欲しいものを、軽々と手に収めることができるのである。ただし、繰り返しとなるが、「本来的な現存在」は、そうした「合理性」のみでなく、様々な宗教的、倫理的、美的な価値観を持つ以上、合理性のみを基準として振る舞うわけではない。

以上、「本来的な現存在」と「非本来的な現存在」を二分して論じたが、実際には、全ての個人が両者の側面を持つ、と考えることの方が妥当であろう。すなわち、本来的時間性と非本来的時間性の双方を各人が携えていると考えるのが適当であろう。したがって、彼が現存在である以上、本来的時間性を起源とする道具的連関性以

表1 本来的現存在と非本来的現存在による「現在」「将来」「既存」に対する意味

	既在－現在－将来
非本来的現存在	忘却－現前－期待
本来的現存在	反復－瞬間－先駆

上のシンボル体系（以下、便宜のためにこれを、「非道具的シンボル体系」と呼ぶこととしよう）を、多かれ少なかれ携えているだろう、と期待できるのである。

10. 非道具的シンボル体系の学習

さて、そうした、非道具的なシンボル体系は、どのようにして形成されるのであろうか。

その第一に考えられるのが、歴史的、伝統的、社会的に共有された「シンボル体系」である。その中心にあるものが言うまでもなく「言語」であるし、その言語を使って伝承されている様々な文化や宗教、風習である。つまり、「歴史的・伝統的・社会的に共有されたシンボル体系の学習」が、非道具的シンボル体系の学習において重要な役割を担うのである。

こうした社会的に共有されているシンボル体系は、どこかある一時点で作られ、その後全く変化しない、というようなものではなく、歴史の中で徐々に変容していくものである。それ故、各現存在の生の働きかけによって変化するものでもある。

すなわち、歴史的・伝統的・社会的なマクロレベルのシンボル体系は、現存在の生の相互作用、すなわち、社会的なコミュニケーション過程＝「社交」によって動的に変容するものである。そして、そのマクロレベルのシンボル体系の変容は、再び現存在のシンボル体系の変容をもたらすこととなる。

ここで、非本来的時間性に支配された非本来的な現存在は非道具的シンボル体系を持たない存在であるから、非本来的な現存在が参与するコミュニケーションでは非道具的シンボル体系が変容するとは考えられない（事実、それを裏付ける実験データも得られている[18]）。さらに、コミュニケーション過程の中で、何らかの新しい「意味」あるいは「解釈」が見いだされた時に初めて、シンボル体系の変容が生ずるのであろうという点を踏まえると、「**本来的な現存在同士の社会コミュニケーション過程において生じる弁証法的止揚** [19]」を通じて、非道具的シンボル体系の精緻化をもたらすものと考えられる。

さらにこうした弁証法的止揚は、必ずしもコミュニケーションが不在であっても生じうるものである。

そもそも、「現存在」が「非本来的な現存在」ではなく、「本来的な現存在」となりうる唯一の契機は、瞬間瞬間の超越であり、それを通じて、シンボル体系が本質的に深化し、変質することとなる。キルケゴール [20] はこの超越を「質的弁証法」と呼び、ヘーゲルのそれを「量的弁証法」と呼称した上で両者を区別している。この質的弁証法は、あれもこれもといった止揚による総合ではなく、あれかこれかの決断による、挫折に基づいて飛躍するものとして定義される。すなわち、「**本来的な現存在**」による、「あれかこれか」の決断による挫折に基

づく質的弁証法的止揚」によって、非道具的シンボル体系が、美的、倫理的、宗教的な価値を携えるに至ることとなると考えられるのである。

11. 選好形成プロセスの構造

本稿では、経済学や心理学、社会学、政治学などにおいて重大な役割を担っている「選好」に着目した。そして、これまで、一部において為されていた僅かな範囲の考察・検討以外には、諸社会科学の中でほとんど議論されてこなかったにも関わらず、上記の諸社会科学に重大な影響を及ぼしうる「選好の形成」の過程に関する包括的な論考を加えた。

この問題を考えるためのアプローチには様々なものが考えられるが、本稿ではとりわけ、包括的な議論を目指し、ハイデガーの現象学的存在論を理論的な枠組みとした選好形成プロセスについての哲学的考察を行った。この現象学的存在論では、人間を、言葉を駆使しつつ様々な現実的、仮想的な事物に様々な意味を付与する「シンボル体系」を形成する存在＝現存在と見なす。それ故、選好の形成過程とは、畢竟、このシンボル体系の形成過程であると見なした考察を加えた。

考察の結果、本稿では、選好の形成過程においては、表1に示すような、3つの階層の学習、すなわち、

（第一階層）シグナルの環境構造の学習

（第二階層）道具的なシンボル体系の学習

（第三階層）非道具的なシンボル体系の学習

によって、シンボル体系が形成され、それを通じて選好が形成されていく理論的可能性を論じた。

もちろん、それぞれの階層での学習として、どのようなものがあるのか、それぞれの階層の学習が他の階層の学習にどのような影響を及ぼし得るのか、社会的、歴史的な学習の影響過程は如何なるものか等、論究すべき問題は数多く残されている。本稿では「選好形成の構造」という問題について、これまでほとんど十分な論考が加えられてこなかったという点を踏まえ、可能な限り「包括的」な論考を加えることを目途としたが、今後は、上記のような数々の課題を見据え、仔細な論考を重ねていくことが必要である。

脚 注

[1] こうした行動主義的な学習理論は、あくまでも行動の傾向のみを記述するものであるから、本稿で議論しているような心理的側面を含む「選好」という概念を直接的に論ずるものではない。ただし、本稿では、「選好」を、行動的な傾向性の次元も含めたものとして定義して議論するものであることから、そうした行動主義的学習理論を、本稿で言うところの「選好」という概念を用いて再解釈することは理論的に可能である。

参 考 文 献

- [1] 竹村和久 (2009) 行動意思決定論—経済行動の心理学, 日本評論社.
- [2] Elster, Jon (1989), Nuts and Bolts for the Social Sciences, Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- [3] Tversky, A., & Kahneman, D. (1981). The framing of decisions and the psychology of choice. *Science*, 211, pp.453-458.
- [4] Slovic, P. and S. Lichtenstein (1983) Preference reversal: A broader perspective, *American Economic Review*, 73, pp.623-638.
- [5] Svenson, O. (1992) Differentiation and consolidation theory of human decision making: A frame of reference for the study of pre- and post-decision process, *Acta Psychologica* 80, pp.143-168.
- [6] Montgomery, H. (1983) Decision rules and the search for a dominance structure: Towards a process model of decision making. In P.C. Humphreys, O. Svenson, and A. Vasi (eds.) *Analyzing and Aiding Decision Process*, North-Holland, Amsterdam, pp.343-369.
- [7] Fujii, S. and Gärling, T. (2003) Application of attitude theory for improved predictive accuracy of stated preference methods in travel demand analysis, *Transport Research A: Policy & Practice*, 37 (4), pp 389-402.
- [8] マルティン・ハイデッガー (著), 桑木務 (訳) 存在と時間, (上) (下), 岩波文庫, 1960.
- [9] 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・リチャードW. マロット・アリア. E. マロット: 行動分析学入門, 産業図書, 1998.
- [10] 木田元: ハイデガー『存在と時間』の構築, 岩波現代文庫, 2000.
- [11] チャールズ・モリス: 記号と言語と行動—記号と言語と行動—意味の新しい科学的展開—, 三省堂, 1972.
- [12] メルロ＝ポンティ (著), 滝浦静雄・木田元 (訳): 行動の構造, みすず書房, 1964.
- [13] ボイテンディック (著) 浜中淑彦 (訳): 人間と動物, みすず書房, 1970.
- [14] 戸田正直: 感情—人を動かしている適応プログラマー, 東京大学出版会, 1992.
- [15] 藤井聡: 社会的ジレンマの処方箋, ナカニシヤ出版, 2003.
- [16] 藤井聡: なぜ正直者は得をするのか, 幻冬舎新書, 2009.
- [17] ホセ・オルテガ・イ・ガセット: 大衆の反逆 (1930), (神吉敬三 訳), ちくま学芸文庫, 1995.
- [18] 小松佳弘, 羽鳥剛史, 藤井聡: 個人の大衆性と弁証法的議論の失敗に関する実証的研究, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, vol.39, 2009.
- [19] ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル: 精神現象学 (1807), (長谷川宏 訳), 作品社, 1998.
- [20] セーレン・キルケゴール: 現代の批評 (1846年刊), キルケゴール 死に至る病・現代の批評 (梶田啓三郎 訳), 中央公論新社, 2003.

(2010年5月1日受理)

著 者 紹 介



藤井 聡

京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻教授。1968年奈良県生まれ。京都大学卒業後、東京工業大学教授等を経て現職。専門は交通工学、公共心理学、社会的ジレンマ研究にて日本学術振興会賞、文部科学大臣表彰若手科学者賞、認知的意思決定研究にて日本行動計量学会優秀賞(林知己夫賞)、文芸批評にて表現者奨励賞等、受賞多数。主な著書は「なぜ正直者は得をするのか」「社会的ジレンマの処方箋」「土木計画学」等多数。